

修士 (2020 年度)

公共図書館による公共圏の創出 ——新宿区立大久保図書館の多文化サービスを事例にして——

宮澤 篤史

1. 問題関心

本研究では、公共圏と公共図書館の連関を検討することを目的とし、文化的・言語的に多様な背景をもつ利用者を対象にした多文化サービスを実践してきた新宿区立大久保図書館でのサービス実践を事例として分析を行った。

近年、公共図書館の「誰にでも開かれている」という原則を端緒に、グローバル化の進む社会における「公共性とは何か」「民主主義とは何か」という議論が盛んに行われている。これは、地域社会において平等かつ開放的で利用者の参加を可能にし、交流を促進する「場」として公共図書館の意義が見出されてきているからであるといえる。そして、図書館情報学では「場としての図書館 (library as place)」の枠組みで研究が進められており、多様な利用者が図書館に集い、討議するようすを J. Habermas の公共圏概念でとらえようとする試みもみられる。しかしながら、公共圏と公共図書館の連関については経験的研究の不足が指摘されており (Widdersheim & Koizumi 2016)、さらに、社会学の分野では公共図書館自体がほとんど対象にされてこなかった。

2. 先行研究と問題設定

公共性とは正当性の判断基準であり、公共圏とは討議にもとづくコミュニケーションの空間である。どちらにおいても、その「主体」をめぐる議論が行われてきた。公共性の議論では市民が主体となり、社会的共同性を強調する「公<共性」の意味での公共性が志向されるようになっている (山口 2003)。公共圏の議論では、国民国家、ないし公共圏への参加者としての「国民」の存在を Habermas は前提しているという批判がある。そして近年では、公共圏から排除されている「他者」(エスニック・マイノリティや社会的弱者)の存在に関心が向けられるようになってきている (中村 2014)。

また、「場としての図書館」研究のレビューからは、一連の研究では民族や国籍の異なる利用者どうしの相互交流が前提されていることを指摘した。これは、日本において公共図書館では、利用者としての「国民」像が自明とされてきたことを踏まえると重要である。

まとめると、公共性／公共圏の議論でも、公共図書館の利用者像についても、「主体」の同質性を前提してしまうことに注意を払う必要がある。本研究では、公共圏へ参加する主体、また、公共性の主体に注目しながら、1) 大久保図書館を中心としてどのように公共圏が形成されるのか、2) そこでの公共圏の機能は何か、3) 大久保図書館の多文化サービスの「公共性」とは何か、という3つの問いを設定し、研究を進めた。

3. 調査結果

新宿区立大久保図書館で実施されているイベントプログラムでの参与観察と、同図書館館長への半構造化インタビューを実施した。大久保図書館は2010年ごろから多文化サービ

スを推進しており、多言語資料の収集・提供だけでなく、他の国や地域の文化を学んだり利用者どうしが交流できるイベントプログラムも積極的に実施してきた。本研究では、イベントプログラムのなかでも「ビブリオバトル」（本の書評大会）に着目し、分析した。

ビブリオバトルでは、民族や国籍の異なる利用者どうしが本の紹介と質疑応答を通して意見を交換しあうようすが観察された。本の紹介や質疑を通して、異なる国や地域の生活様式や習慣、言語について話したり、ジェンダー観の違いや差別の存在の指摘といった普遍的・規範的な価値を足掛かりとして日本社会のあり方を問うなど、さまざまな意見が出されるようすは、討議の一実践であり、公共圏が形成されているといえる。そこでの公共圏の機能は、「差異」の強調とそれによる「他者」の存在の可視化であると分析できる。そして、「〇〇人って概念がない」「誰も置き去りにしない、そういう図書館」という館長のことばからわかるように、大久保図書館で目指されるのは「差異」による分断・排除ではなく、「差異」を前提とした理解・受容である。

また、館長へのインタビューからは、大久保図書館の多文化サービスが図書館単体の取り組みで成立しているのではなく、NPO や個人、行政との共同によって成立しているようすが浮かび上がってきた。日本国内で流通していない多言語資料の収集やイベントプログラムの開催、館内展示にあたって館長は常にコミュニケーションを欠かさない。すなわち、日常的に大久保図書館を中心として生起するコミュニケーションの圏もまた、多文化サービスを支える公共圏なのである。

4. 結論

大久保図書館でイベントプログラムとして実施されたビブリオバトルにおける公共圏、および大久保図書館と共同する NPO や個人、行政とのあいだでのコミュニケーションの圏としての公共圏が、大久保図書館を中心として複層的に現れている様相を明らかにした。そこで形成される公共圏の機能は、受容を前提とした「差異」の強調と「他者」の存在の可視化であった。そして、大久保図書館の多文化サービスのもつ公共性は、知る権利や学習権、言語権といった普遍的人権の保障と「国民」に限定されないアクターとのあいだでの社会的共同性であると考察した。こうした大久保図書館での公共圏、ないしサービスの実践は、Habermas が想定していた公共圏への参加者、ないし図書館の現場・研究で自明とされてきた利用者としての「国民」像を明示的に超えるものである。

参考文献

- 中村健吾, 2014, 「境界線を引きなおして他者を迎え入れる——公共圏, 親密圏, シティズンシップ」
田中紀行・吉田純編『モダニティの変容と公共圏』京都大学学術出版会, 97-121.
Widdersheim, M. M. and M. Koizumi, 2016, “Conceptual Modeling of the Public Sphere in Public Libraries.”
Journal of Documentation, 72(3): 591-610.
山口定, 2003, 「新しい公共性を求めて」山口定・佐藤春吉・中島茂樹・小関素明編『新しい公共性——そのフロンティア』有斐閣, 1-28.